

ahaki

あはき あん摩・はり・灸のおしごと

vol.01
july, 2022



ahaki 第一号は

函館視力障害センターに

今年4月に赴任した

新人教官の鳥丸大地が

あはき師を職業選択したストーリーである

ものごとを積み重ねると必ず結果が出る。決して悪い方向にはいかないし、目が悪いことを恐れてはいけないと思う。

鳥丸大地

【幼稚園～中学時代】

勉強より遊び 子どもの頃

幼稚園の頃から風邪も引かなかったし休まず通いました。皆勤賞です。中学生まではよく外で遊んでいました。テレビゲームも流行っていたけど、家にいるより外で遊ぶのが好きでした。

目のことを意識せずに過ごした

片眼が斜視という見た目上からも、周囲の友達からは、「目が悪いの？」と聞かれることがありました。親に相談すると「目が悪い」と言っておくようにと

言われ、それがよかったのか、目のことを障害と意識せずに過ごしました。

【高校時代】

将来の仕事「人の痛みを和らげる」

中学からサッカーをはじめて、それがきっかけとなり、身体に興味を持つようになりました。ちょうどその頃、ケガで通っていた整骨院での施術体験を通して、「人の痛みを和らげる仕事はいいなあ」と思うようになりました。

鳥丸大地 profile

大阪生まれ

森ノ宮医療大学卒

大阪府立大阪南視覚支援学校卒

あはき師 理療科教員





医療系大学進学へ

3年生になると進学を考えますよね。もともと体育が好きだったこともあって、周囲から勧められ体育を教えるという選択肢ができました。そこで、人の痛みを和らげる仕事を目指したいという希望もあり、医療大学の鍼灸学科を勧められました。更に医療大学の指定校は体育の免許がついてくるので、鍼灸学科の中のスポーツ特殊コースを選びました。

【大学時代】

目が悪いことを周囲に伝えた

勉強面の不安があったことから、大学生になってから、目が悪いことを自ら伝えるようになりました。その結果、助けてもらうこともありました。そこで学んだことは、自分から言わないと変わらないということ。しかし、目が悪いことを言うってしまうことで、「差別を受けるのか?」という不安も当然ありました。

僕の職業を決めることになった人との出会い

大学では4年生になっても仕事は決まっていなかったし、何をしたいのか分からなかった状況でした。そんな状況を大学の学生支援室に相談、そして、弱視であることも打ち明けたところ、大学の理学療法科の弱視の先生を紹介されました。視覚支援学校であん摩の免許を取り、さらに進学してあはき師の教員になるよう言われました。先生から背中をぐっと押された感じで、進路が決まりました。でも、卒業まで5年かかると思うと、就職に向けて出遅れた感に躊躇しましたが、目が悪いからこそ、絞って飛び込んでみよう、遅れは年数かかっても絶対取り戻してみせると自分に言い聞かせました。そして、周囲と比べてはダメということの結果的に学ぶことができました。

【特別支援学校・あはき教員養成課程】

支援学校のこと

イメージは暗かったです。いざ学校に入ると、あちらこちらから笑い声が聞こえてきて、普通の学校よりむしろ明るくない?と思ったほどです。クラスメートに恵まれ、3人の仲間とともに楽しい学校生活を過ごしました。年齢構成ですが、僕が23歳、クラスメートは、19歳、30歳、一番年上の人が36歳でした。目のことを言われても心がぐらつかない

人ばかりでした。

障害者手帳のこと

親からは手帳はとってほしくないと言われていましたが、大阪の視覚支援学校の3年生の時に、障害者手帳を取得しました。今は、制度のサポートが得られることから親も納得していますし、恥ずかしいことはないと思っています。手帳を持っている僕の周囲の人は皆元気、壁を乗り越えた感じがします。

コロナ禍で始まった東京の茗荷谷・教員養成課程そして教官に

学校はコロナ禍で始まり、クラスメートとの初めての顔合わせが7月になりました。17名のクラスで、僕はクラス委員長に立候補しました。54歳のクラスメートがいて、この人だ!!という僕の直感が働き、彼女は僕を助けてくれる貴重な盟友となりました。大変な学生生活でしたが、無事に卒業しまして、ここでも教員免許を得て、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局の理療課教官採用試験に受かり、函館視力障害センターに配属されました。そこが、今の僕の職場となりました。

【これから職業を選択する皆さんへ】

僕の心がけていること

自分の居場所は自らがつくるものであるという信念があります。大学では常にクラスの委員長や学生長に立候補し、周囲とつながれることを意識しています。目の悪さは関係ないと思っています。その心かげはラーメン屋でのバイトで、バイトリーダーになるまでの工夫につながりました。大学1年生から特別支援学校時代を通して、バイトはやってきました。

あはき師を一つの職業の選択肢として

「目が悪いこと＝何もできない」ではない。いろいろな進路の方向性があるけど、僕はあはき師の道を選んだ。目が悪くてもチャレンジする気持ち、自分の中の覚悟を確かめるようにこの職業を選んだ。目が悪いことをマイナスに思わないことが大事、なぜなら、人は誰でもコンプレックスがあるものだし、僕はたまたまそれが目であったということに過ぎないからです。



ahaki 創刊にあたって

北海道の函館市に視覚障害者の方を対象とした「あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師」の養成施設があります。ここで学ぶ仕事のことを、頭文字をとって「あはき師」と呼んでいます。ahakiは、「あはき」の仕事の魅力、伝承医術としての「あはき」の奥深さについて、それらを未来へとつなげていく人を通して伝えていきたいと思えます。

創刊号は、「大地 だいち」という北海道らしい名前の函館視力障害センター教官の鳥丸大地のストーリーをお送りしました。

ahaki

発行者

国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局函館視力障害センター

自立支援推進委員会 地域連携分科会

公立ほこだて未来大学 Co-Design ラボ

vol.01

2022年7月30日 発行